

ヨハネ福音書におけるイエスのアイデンティティ  
—「エゴ・エイミ<sup>1)</sup>」定型句・  
絶対的用法の人間学的考察—

小林 宏子

I. はじめに

筆者が人間学の授業を通して目指すのは学生一人一人が「ありのままの自分」に気づき自己を肯定することの価値を知ることにある。それは、キリスト者である筆者が「人間の救いとは、神の前に限りなく肯定された真の自己を見出してゆくことにある」<sup>2)</sup>と信じるからであり、本学に入学した学生が、他人の目に映る自分を整えることに汲々とするあまり、自分らしさを生きるための力を十分に発揮できないままで、短い学生生活を過ごすことがないようにと願うからでもある。毎年、人間学Ⅰのテキストの中で学生達が敏感に反応するのは、対話の単元に解説されているマルティン・ブーバーの考えであり、特に「真に生きる」ことと「見せかけに生きる」こととを対比する次の箇所である<sup>3)</sup>。

『真に生きる』人間は、相手に映る自分のイメージを気にすることなく自然に自己を他者に投げかけるが、『見せかけに生きる』人間は逆に、まず他者が、自分をどう見ているかに関心を寄せ、自分を『自然』とか『誠実』とかその他、自分が他者に受け入れられそうな外見を装うのである。こうした見せかけへの傾向が生ずるのは、まったく存在が確認されないよりは、偽りにでも存在が確認されたいという欲求があるからである。」

この箇所を通じて、学生達は自己の中の「存在確認への欲求」に気づくと同時に、その欲求達成のために自分達が講じている手段が、果たして正当か否かの考察へと導かれ、自分の態度を決める“自由”の行使の問題にぶつかっていく。しかし、本学における人間学が意図するのは、単に「建前の私」を捨てて「本音の私」を表現すべきであると教えるも

のではない。むしろ「建前の私」や「正直な私」を越えたその奥にある「真実の私」、又は「超越的自己」や『『生きてある存在感』としてのアイデンティティ』と呼ばれる実感に目覚めること、及び、その肯定にまで導くことである<sup>4)</sup>。

とは言っても、現実には、限られた時間と学生達の問題意識とのギャップ、そして講義する者の限界を日々感じるばかりなのであるが、拙論が取り扱おうとするのは、「真の神・真の人」であるイエスについて、ヨハネ福音書に特徴的な「エゴ・エイミ」定型句の絶対的用法が用いられている箇所を、アイデンティティという人間学的テーマに関連付けて考察しようとする試みである。結論から言えば、ヨハネ福音書が描くイエス像は、「ナザレのイエス」という一人の人間がその「真実の私」において、神の人類に対する愛と完全に一つとなって生きていたことを証しするものであり、それ故にこそ、神の愛を最終決定的な仕方で啓示する「神の子」であると証言されていることを述べる。

## II. ヨハネ福音書におけるイエス

### 1. ヨハネ共同体の信仰の反映

昨年、メル・ギブソン監督による『パッション』という映画が話題を呼んだ。ゲッセマニの園の場面から始まるイエスの受難と死（最後に復活もわずかに描かれる）が、今まで描かれたことのないようなリアルな映像で描かれている。皮膚は破れ、肉片が飛び、血潮が流れても尚、執拗に続く鞭打ち。憎しみに溢れた残酷極まりない仕打ちを受けた後に、イエスは十字架上に釘づけられ、息を引き取ってゆく。メシアの死、それは、原始キリスト教にとっても躓きになりかねない出来事であった。しかし、マルコ福音書が「わが神、わが神、何故、わたしをお見捨てになったのですか」(15:34)と絶望の叫びのうちに死んで行くイエスを描くのは異なり、ヨハネ福音書は十字架上に自分の啓示の業を完成するために、「ご自分の身に起こることを何もかも知っておられた」上で「進み出て」(18:4)捕縛され、その死を自らの能動的な行為として引き

受けてゆくイエスを描く<sup>5)</sup>。ヨハネ福音書は、イエスの十字架死を「栄光化の時」とする。

確かにヨハネ<sup>6)</sup>のイエスは一見すると、「先在」の場所から地上に下り、地上での啓示の業を終えた後、再び天へと帰って往く、苦しみを知らない「天的救済者」のように受け取られかねない<sup>7)</sup>。しかし、そのような時間的経過に従って読む方法では、ヨハネのイエスを理解することはできない<sup>8)</sup>。なぜなら、ヨハネのイエスは、史的イエスの記述であるよりもむしろ、ヨハネ共同体の信仰するイエスが反映された形で描かれているからである。つまり、フェリサイ派主導のユダヤ教との衝突や、ローマ帝国から被る宗教的弾圧という危機的状况にある共同体の経験の中に現存しているイエスを、史的イエスの伝承に織り交ぜて描き出しているのである<sup>9)</sup>。そのように共同体の立場と宣教を、福音書中のイエスの言動に含ませることによって、福音書記者は、共同体のケリュエグマの中で語るのはイエスであることを表す手法をとっている<sup>10)</sup>。

## 2. 現在終末論の人の子

ヨハネにおいても共観福音書と同様、イエスは自分を「人の子」と呼ぶ<sup>11)</sup>。しかし、この名称はヨハネのキリスト論的尊称の中で最も特徴的、かつ重要なものであろう<sup>12)</sup>。通常、共観福音書においてイエスの口にのぼる「人の子」句は、三つのグループに分類される。一つは、世界の終わりに天から来る審判者・救済者としての未来的・黙示的人の子<sup>13)</sup>。二つ目は人の子であるイエスの地上の働きについての句<sup>14)</sup>。そして、三つ目は人の子についての受難と復活の予告<sup>15)</sup>である。

ところがヨハネにはこのような区別がなく、三つの要素すべてを地上のイエスが担っている。しかも共観福音書においては、黙示的終末論的人の子にのみ帰されていた栄光が、ヨハネでは地上のイエス全般に帰されて描かれる<sup>16)</sup>。従ってここに、福音書記者が表現する信仰解釈の鍵がある。つまり、福音書記者は復活したイエスが、信者達のうちに、また、信者達を通して働き続けていることを体験し、十字架上で死んで

復活し、今、信者達の宣教の内に到来し、現存するイエスこそ、待望されていた終末的審判者・天的救済者の「人の子」であると理解している<sup>17)</sup>。そしてこの「人の子」の内実は、イエスが地上での一回限りの人生を歩み、死んで復活し、神の右の座に挙げられた出来事を通して確定されたものであり、イエスが自己の呼び名として用いることが可能な「イエスのアイデンティティ」であると言えるだろう。その意味でヨハネの「人の子」は、歴史的な時間配列の中に収まらない次元の存在<sup>18)</sup>を表す場合にも、十字架死を含む地上の存在を表す場合にも同様に機能する呼称となっている。

そう考えるとイエスのアイデンティティにも生成としての人間存在の有様が当てはまる。即ち「人間は生まれた時に一つの現実になるのではなく、むしろ死ぬ時に現実になるのだ。つまり人間は死のその瞬間において、自分自身を〔創っている〕のである。自己とはなんらかの〔状態 (be)〕ではなく、何かになっていく〔生成 (becoming)〕である。それゆえに人間の自己は死によって人生が完成する時に初めて完成する<sup>19)</sup>。」

そこで、ヨハネのイエスの場合、死によって完成したアイデンティティとは「高擧された十字架のイエス」であり、同時に霊によって到来する「人の子イエス」である<sup>20)</sup>。こうして、ヨハネのイエスは歴史的な時間を超えた読者と共に、福音書の言葉を通して地上の歩みをたどる場合も、常に一貫して「高擧された十字架のイエス」として歩むために、地上のイエスでありながら栄光を表す存在として描かれるのである<sup>21)</sup>。

### 3. 神の愛の啓示者：神の独り子

一方、ヨハネのイエスを一言にまとめて表現するならば、「神を示す」(1:18) 唯一の啓示者である。しかし、福音書記者にこの認識をもたらしたのは、ヨハネ共同体の聖霊の体験であり、聖霊を通して現存するイエスの体験である。ヨハネの序文1章1節から18節までのロゴ

ス讚歌は、「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」という言葉でまとめられており、その後に展開されることが、神の独り子が父なる神を啓示する言葉と業であると告げる設定になっている<sup>22)</sup>。「ふところ (κόλπος)」という語は、旧約聖書の 70 人訳では、「胸」に抱かれる者に対する「胸」に抱く者の特別な配慮と両者の親密な相互関係を表す語である<sup>23)</sup>。従って、ヨハネでも独り子と御父との親密な関係性を表すのに用いられており、御子は、その親密性において、御父がいかなる方であるかを啓示する<sup>24)</sup>。「独り子」は「愛する子 (ἀγαπητός)」と同様な意味を持ち、ともにヘブル語 יחיד (yachid) を指す<sup>25)</sup>。ヨハネ 3:16 には「神は、その独り子をお与えになったほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」とあり、独り子という言葉によって、父の子への愛が描かれると共に、そのような子を与えることによって、神の世への愛が比類なきものとして示され、かつ根拠づけられている<sup>26)</sup>。

しかし、イエスが神と子と父の関係にあるということは、何かアプリアオリに成立しているイエスの存在論的本性(神性)を記述するものではない<sup>27)</sup>。それは「人の子」において見出された信仰であり、「高举された十字架のイエス」の命のあり方は、父である神のあり方と一致していたという意味である。即ち「わたしはいつもこの方(わたしをお遣わしになった方)の御心に適うことを行うから」、「父はわたしと共におられ、わたしをひとりにはしておかれない」(8:29 参照)とある通り、イエスの地上での生き方の根本が、神に対する絶対的従順において、父の意思とその業を行うことにあったことを強調するための表現である<sup>28)</sup>。福音書記者は、父のみ旨に全く一致し、父の終末論的救済意志の表現である δει (ねばならない) を具体的に実行して、苦難を引き受け、十字架にかけられて死んだイエスであるがゆえに、イエスは神が派遣した者として神の愛する独り子・愛する子であることを見出したのである。福音書記者がイエスこそ神の唯一絶対的な啓示者であると主張

する場合の絶対性の根拠は、彼を派遣した神に由来すると共に、その神の御心が自分の人格において歴史の中に現存するようにと、自らを全く虚しくし、神の道具として捧げきったイエスの命のあり方に置かれている<sup>29)</sup>。イエスが父と一つであるのは、独り子を与えたほどの父の愛に、子も一致して命と生涯を捧げたことにおいてである。

### Ⅲ. イエスのアイデンティティ

#### 1. 「エゴー・エイミ」定型句・絶対的用法

そこで、上記の独り子イエスと父との一致を表現するために、福音書記者はイエスの発言に「エゴー・エイミ」定型句の絶対的用法を用いている(8:24, 8:28, 8:58, 13:19)<sup>30)</sup>。この表現は、一人称単数代名詞「エゴー」と英語の be 動詞にあたる「エイミ」だけの組み合わせであり、文法的には動詞の活用形によってすでに「わたしは～である」という意味を表すことができ、その場合、主語「エゴー」は強調の意味であると思われる<sup>31)</sup>。また、エイミを「存在する」という意味の本動詞にとれば、「わたしはいる」「わたしはある」と訳することができる。一方「エイミ」を「AはBである」という場合の「である」の意味の繫辞ととれば、Bに当たる補語が省略された形と解釈できる表現である<sup>32)</sup>。

イザヤ書40～55章において、「私が主(ἐγὼ κύριος)」「私が神(ἐγὼ θεός)」と訳されるのが普通とされる「אני יהוה」(私は YHWH)を、70人訳聖書は繫辞「エイミ」を補って訳したり、ただ「エゴー・エイミ」とだけ訳したりする<sup>33)</sup>。また「אני יהוה」(私は YHWH)と同義的に用いられる「אני-הוה (ani-hu) > わたしはそれ [である]」の訳語にも、「エゴー・エイミ」を当てている<sup>34)</sup>。すなわち、第二イザヤ書において、ヤハウエのみが神<sup>35)</sup>、世界の創造者<sup>36)</sup>、イスラエルの救済者<sup>37)</sup>であることの主張<sup>38)</sup>に用いる「エゴー・エイミ」を、ヨハネはイエスの口に上らせているのである。

## 2. アイデンティティと〈わたし〉(エゴ)という言葉

さてここで、エリクソンのアイデンティティ理論<sup>39)</sup>を参考にして、この「エゴ・エイミ」定型句の考察を進めよう。まず、アイデンティティとはもともと何かと何かの合致であり、常に複数の構成単位を内に含むものである<sup>40)</sup>。それゆえ、青年期のアイデンティティ問題は、〈わたし〉が〈わたし〉であるという、本来、何より確かなことであるはずのことについて、当の〈わたし〉自身が一体〈わたし〉は何者なのかと疑うことによって、〈わたしである〉という確実性それ自体が揺らいでしまっている状態の問題として起こる<sup>41)</sup>。なぜならこの〈わたし〉が誰であるかはそれ自体で決まっているわけではなく、発達各段階に応じて、また〈わたし〉にとっての重要な〈意味ある他者〉によって、規定されてくるものだからである<sup>42)</sup>。それは青年期の場合、それまでに積み重ねられてきた複数の「アイデンティフィケーション」を新しく組み直すという仕方、「自分は何者なのか」を決める問いでもあり<sup>43)</sup>、多くの可能性の中から一つを選び取ること、言い換えれば、他の可能性を、さしあたりは〈捨てねばならない〉という意味において、立場を一つに〈限定する〉<sup>44)</sup>葛藤を含む事柄である。

つまり、アイデンティティとは、「〈わたし〉が〈わたし〉である」という「心の内側の主観的な領域」で保証される確実性を意味するだけでなく、他方、〈わたし〉は他者や社会から承認されることによってはじめて〈わたし〉であるという、いわば「心の外側の客観的な他者」による承認や帰属感とセットになって成り立つ〈アイデンティティの感覚〉を意味する言葉なのである<sup>45)</sup>。

ところで、この〈わたし〉という言葉について、エリクソンはそれを自我(ego)、自己(self)、〈わたし〉(“I”)に区別して用いる<sup>46)</sup>。しかも、その区別はそれぞれの「相手とするもの(counter-player)」が違ふと説明する<sup>47)</sup>。柳田氏の表現を使えば、「正直な私」「建前の私」「真実の私」に当てはめることができるだろう<sup>48)</sup>。エリクソンは、〈わたし〉(“I”)を、個々人の内部にあって自覚や意志を観察している中

心とし<sup>49)</sup>、それは青年期の発達課題としての心理社会的アイデンティティを超越することができ、またそれを乗り越えて生き残らなければならない〈アイデンティティを越えたアイデンティティ〉とでもいうべきものと説明する<sup>50)</sup>。そして更に、この〈わたし〉(“I”)の根底には、様々な自己をすべて経験しつつ、しかも意識的連続性をもった〈わたし〉という感覚(a sense of “I”)が存在することに注目する<sup>51)</sup>。それは、単に、意識的一貫性(conscious continuity)や自己斉一性(self sameness)を持つという意味なのではなく、人の意識に「一つのヌミノース的中心」を与え、人が自分自身を一つの中心(a center)として感じることができる機能であるという<sup>52)</sup>。従って、〈わたし〉(“I”)という言葉は、相互に了解し合える経験世界の中で、一人一人の個人が、自覚しているという意味での「一つの中心である」ということに、「言語の上での保証を与える単純な基盤<sup>53)</sup>、しかし、それなしには〈わたし〉が獲得され得ないという意味では、「唯一の基盤」と言えるものである。

このような意味を踏まえて、ヨハネのイエスが発する「エゴ・エイミ」を、第二イザヤ書の神の発言として考えてみれば、「エゴ・エイミ」定型句の絶対的用法とは、人間に「一つのヌミノース的中心」を与える者である神が、自分自身の中に一つの中心を感じている人間に向かって、その中心と感じる〈わたし〉を超えて、「真の中心」としての〈神であるわたし〉と一致するよう呼びかける神の自己啓示の言葉と理解できないだろうか。今は、ギリシア語訳としての「エゴ・エイミ」のもとになるヘブライ語の表現「אני-הוּא」(ani-hu) / わたし・それ」は考慮せず、ギリシア語についてのみ考えれば、それは、〈わたし〉が〈わたし〉であることの確実性そのものともいえる神の自己提示の表現として「わたし・である」を響かせる言葉と言えよう。人間にとっては、ヌミノース的中心の基盤となる〈わたし〉の与え主である、その根源からの呼びかけに従って、本人の〈わたし〉を形成してゆくことに、一人一人の人間の真実のアイデンティティがあるのではないだろ

うか<sup>54)</sup>。

### 3. 「エゴー・エイミ」の訳語

〈わたしはある〉〈わたしは〔それ〕である〉〈わたしはいる〉

この「エゴー・エイミ」の絶対的用法の訳出については、様々な意見がある。新共同訳聖書では〈私はある〉で統一されている個所を、小林稔氏は次のように区別して訳出する<sup>55)</sup>。

8:24 「・・・〈私が〔それ〕である〉ことを信じないなら、あなたがたは自分たちの過ちのうちに死ぬであろうから。」

8:28 「あなたがたは人の子を挙げる時、その時になって、〈私が〔それ〕であること〉、私自身からは何も行わず、父が私に教えた通りにこれらのことを語っているのを知るのであろう。」

8:58 「・・・アブラハムが生まれる前から、〈わたしはいる〉。」

13:19 「・・・ことが起こった時に、〈私が〔それ〕であること〉をあなたがたが信じるようになるために。」

小林氏はその理由を、ヨハネの場合、福音書記者の関心はイエスの存在論的な主張よりも、イエスの父なる神や人々との関わりが問題になっており、8:58の場合には、「アブラハムが生まれる前から、あなたがたと関わりを持つ者としてわたしはいる」というニュアンスを表すためであると説明している<sup>56)</sup>。また「わたしが〔それ〕である」という訳の場合には、イエスの言葉の背後に、第二イザヤ書の「אֲנִי־הוּא (ani-hu)」という曖昧さを残すヤハウエの自己宣言が想定されていることを表すためであると言う。確かに8:28のイエスの言葉が「自分勝手には何もせず、そのまま父に教えられたとおりに話している」と続くことや、人間の救いが、イエスにおいて啓示されていることを受け入れるか否かにかかっているという主張へと繋がっていることから明らかなように、ヨハネは、ヤハウエの唯一性や絶対性の主張をイエスの発言に適用している<sup>57)</sup>。そうすることで、ヨハネは、イエスを第二イザヤ書において、自分こそが神であり民を救うために「〈見よ、ここにいる〉」と言う者で

ある」(イザヤ 52:6)<sup>58)</sup>と主張する神を啓示する者として示すのである。

#### IV. イエスの〈わたし〉と「エゴ・エイミ」

##### 1. 超越的アイデンティティ

しかし、この拙論では聖書学的考察には深入りせず、イエスの発言の背後に神の言葉が存在することのみを確認して論を進めたい。エリクソンは、人は生きるためにアイデンティティを必要とし、むしろ、それなしには心理社会的に生きることが出来ないが、そのアイデンティティを形成することこそが、人間の歴史において、差別や偏見を産み、憎悪や敵対を産み出す原因であったこと、また、人は自分のアイデンティティを補強し確固としたものとするために、しばしばそのような偏見や排他性を必要としてきたことを認めなければならなかった<sup>59)</sup>。つまり、人は「自分はそうあってはならない」イメージを集約した「否定的アイデンティティ (negative identity)」を、いわば、自分の外側に、「自分よりも下の人間」に押し付けることによって、はじめて自らのアイデンティティを形成することができるというのである<sup>60)</sup>。そして、人類のこの悲劇的な事態を乗り越えるためには、〈この地上を越えたところに〉〈理念としての〉アイデンティティを設定することが必要であり、そこに希望を見出そうとする<sup>61)</sup>。

すなわち、アイデンティティとは、あくまでも心理社会的な自己の中心であって、一つの選択、一つの限定によってはじめて成り立つ感覚であるため、その限定は同時に〈排他〉となり〈偏見〉となり、否定的アイデンティティの形成を免れない。従って、平和と共存を望む人間であれば、意識的に絶えずアイデンティティを形成すると同時に壊し、壊すと同時に作り直すという、自己超越の営みを必要とするのである<sup>62)</sup>。地上に生きる人間が、本人にとっては絶対的でありすべてである自らのアイデンティティを、実は単なる相対的な歴史の一コマと自覚しうるのは、いわば垂直的に、超越的アイデンティティと直面し照らし出される

ことを通して以外にはありえないのである<sup>63)</sup>。

## 2. 〈エゴ・エイミ〉からの呼びかけ

イエスの「あなたがたは人の子を挙げる時、その時になって、〈私が〔それ〕であること〉、私自身からは何も行わず、父が私に教えた通りにこれらのことを語っているのを知るであろう。」(8:28)という言葉に示されているように、「エゴ・エイミ」定型句・絶対用法は、イエスの十字架死との関わりの中で、「イエスは何者なのか」というテーマを暗示しながら用いられる。そこで今、ヨハネのイエスのアイデンティティについての考察を、彼に、自分の命を捨てるという自己超越を促した〈超越的アイデンティティ〉からの呼びかけと応えという観点で捉え、〈エゴ・エイミ〉という呼びかけに導かれつつ、イエスは神の愛の最終・決定的な啓示者という、彼の「神の独り子」としてのアイデンティティを実現していったのだと考えてみよう。

イエスにおける十字架とは、権力と暴力によって拘束され、すべてを剥ぎ取られて裸になり、苦難を負うこと、人としての尊厳のかけらもない程に痛めつけられて血を流し、踏みにじられることに耐えること、そのようにして人間の無力で弱く、はかない命を注ぎ出して死んでゆく人の人生を自ら引き受けることであり、人類の歴史を通し、常に誰かの上に押し付けられ、誰かによって担われ続けている否定的アイデンティティとしての〈わたし〉を担うことを選ぶことであった。人間に否定され無視される人間の命。しかし、この否定的アイデンティティを生きることを余儀なくされている人間の中で、本当に否定されているのは命の与え主であり、常に〈わたし・である〉と主張し得る神ではないのか。

それ故、ヨハネはこの十字架のイエスに、人間の拒絶に耐えつつ命を与える〈エゴ・エイミ〉を見、その方と一つになっている「神の独り子としての栄光」(1:14)を見る。なぜなら、「十字架に挙げられたイエス」こそが、それまで人間の目には明らかにされていなかった、神である〈エゴ・エイミ〉の愛を目に見える姿で開示するという栄光<sup>64)</sup>だ

からである。イエスの生涯はそれまでも、その「真実の私〈わたし〉」において、常に〈エゴ・エイミ〉からの呼びかけに従い、教えられた通りに語り、導かれるままに行うというあり方を選ぶことを通して、父なる神の愛と救済意志  $\delta\epsilon\iota$  (ねばならない) に合致 (アイデンティファイ) した神の独り子としての人生であった。それが今、その神の独り子は「生の貫徹<sup>65)</sup>」として、十字架に挙げられるという形で命を与えることへと導かれる。つまり、心理社会的現実の中で、「自分に属するものところに来たが、彼に属する人々は彼を受け入れなかった」<sup>66)</sup> (1:11) と扱われる否定的アイデンティティを引き受け、その中で、「すべての人間を限りなく肯定し、受容し、承認し、担い続けている父なる神の愛と救いの意志  $\delta\epsilon\iota$  (ねばならない) に一致した独り子」の命を貫くためであった。つまり、超越的アイデンティティからの呼びかけに、自分の中の〈ヌミノース的中心〉を合わせることで、心理社会的アイデンティティを乗り越える「道」となるためである。イエスが〈エゴ・エイミ〉を啓示するとは、同時に、その神によって限りなく「肯定され、受け入れられ、承認され、愛されている」〈わたし〉を啓示することでもある。超越的アイデンティティからの呼びかけは、今も、すべての人間の〈わたし〉に向かって発せられている。自分の中に感じ取れる中心を絶対視することなく、この世のアイデンティティを超越せよと。人に否定されることに傷つく時は、神による肯定と承認に〈わたし〉を合わせ、「愛されている者」としての生を全うすべきであると。それぞれの人間の選びの中に〈エゴ・エイミ〉〈わたしはいる〉〈あなたを愛するためにここにいる〉という言葉を響かせるために、「神の独り子」は十字架に挙げられている。

## V. 終わりに

以上の考察のまとめとして、アイデンティティとは定義ではなく、何に自分の中の〈ヌミノース的中心〉である〈わたし〉を合致させて生きるのかという選びの問題であると言おう。ヨハネのように、ズタズタに

引き裂かれた十字架上のイエスに、神を啓示する独り子の栄光を見ることは信仰に属することであろう。また、そこに自己を捨てて自分の命を差し出している神を見出すことも、信仰の目にだけ見えることなのかも知れない。ヨハネにおけるイエスのアイデンティティをどのように表現するかは、人によってさまざまに異なっているだろう。

しかし一方、ヨハネのイエスに、この世のアイデンティティを超越する「新しい人」のモデルを見出すことも可能ではないのか。ヨハネのイエスを信仰の決断を迫る終末論的人の子と受け取ることは理性の働きだけでできる事ではないとしても、そこに、人間が持つ愛の意志の可能性を究極まで貫いた人の姿を見出すことは可能かもしれない。そして、そのイエスに倣い、自分の中の「真実の私」に立ち戻り、〈エゴ・エイミ〉という方の声に耳を傾けることは、多くの人にとって、有益なことではないだろうか。幸い、「エゴ・エイミ」という表現には、補語がない。つまり、限定がないので、全ての人のすべての状況の中で、超越への招きを響かせることができる。人間の無力さ、弱さ、貧しさを否定し、力と富の中にのみ自分のアイデンティティを築こうとする人間の傾向を超越し、〈エゴ・エイミ〉である方の目に映る、一人一人の人間の「真実の私」にふさわしい選択をするためである。静かに心の耳を傾けるなら、その都度、一人一人のためにふさわしい選択を、励まし、導く声が響くであろう。〈わたしである〉〈ここにいる〉〈あなたの傍にいる〉。

〈エゴ・エイミ〉の目にある人間は、常に、すべて「愛されている子」である。その「愛されている子」としてのアイデンティティを生きぬくためには、人間の否定や拒絶を恐れることなく、「真実の私」であり続けるための選択をする必要がある。愛において成熟するためには、どうしても、自己ではなく相手の自由を承認することが含まれる。つまり、相手の拒否する自由を許すことが含まれるので、人から拒否されることを恐れている人は、人間の関わりの中で「神に愛されている者」の本当のアイデンティティを生きることはできない。他の人間に肯定される

為に選ぶアイデンティティではなく、神にすでに肯定されている者が選ぶアイデンティティを探すべきである。選択の時点では見えなくても、後になって、あるいは人生の最後になって現れて来る〈わたし〉の実感、自己超越という課題を抱えた人間一人一人の〈わたし〉が、それぞれに達成してゆくべき姿としての存在感であり、神の目の前にある命の存在感であろう。そして、その神の前での命の姿を永遠の命と呼ぶのではないだろうか<sup>67)</sup>。

## 注

- 1) 本文中は、*ἐγώ εἰμι* (*ego eimi*) を「エゴ・エイミ」とカナ書きにする。
- 2) 柳田敏洋「日常に響く霊性を求めて」『カトリック生活』8月号(2004)39頁
- 3) 理辺良保行「8対話」『現代人間学』2001、春秋社、152～153頁
- 4) 「建前の私」「正直な私」「真実な私」という表現は、柳田敏洋「日常に響く霊性を求めて」『カトリック生活』1月号(2004)35～36頁を参照した。「超越的自己」については、人間学のテキスト及び、V・E・フランク著／諸富祥彦監訳『〈生きる意味〉を求めて』1999、春秋社、67、105～6、146頁他の「人間が持つ自己超越性の特質に関する箇所」等を参照している。更に、「生きてある存在感」としてのアイデンティティとは、西平直『エリクソンの人間学』1999、東京大学出版会、216頁における *a sense of identity* に関する西平氏の解釈中の表現である。第三部10章註10、224頁。
- 5) 大貫隆『ヨハネによる福音書一世の光イエス』1996年、日本基督教団出版局、129～30頁。
- 6) 以下、「ヨハネ福音書」をヨハネと略す。また、「ヨハネ福音書記者」については、福音書記者とのみ記す。
- 7) 小林稔「ヨハネにとってのイエス」『イエスキリストの再発見』1994年、サンパウロ、77～103頁には、ケーゼマンに代表される説

として紹介され、それは誤解であることが解説されている。

- 8) 伊吹雄『ヨハネ福音書注解』知泉書館、2004年、まえがき X 頁
- 9) J.L. マーティン、『ヨハネ福音書の歴史と神学』原義雄・川島貞雄訳、日本基督教団出版局、1984、66～75頁。大貫隆『世の光イエス』1996年、日本基督教団出版局 49～53頁。小林稔・大貫隆訳『〈新約聖書 III〉ヨハネ文書』（岩波書店、1995）解説 147頁参照。
- 10) 伊吹雄、前掲書、220頁。小林稔、前掲記事、86～87、97頁参照。
- 11) 12:34のみが例外。伊吹雄『ヨハネ福音書と新約思想』創文社、1994、180頁、及び『ヨハネ福音書注解』165～166頁参照。
- 12) 伊吹雄『ヨハネ福音書と新約思想』180頁。
- 13) 伊吹雄『ヨハネ福音書注解』165頁。註48：マルコ 13:26 以下並行、14:62 並行、8:38 並行、Q：マタイ 24:27 = ルカ 17:24、マタイ 24:37 - 39 = ルカ 17:26。30。
- 14) 同上。註49：マルコ 2:10、28 並行、Q：マタイ 11:19 = ルカ 7:34、マタイ 12:32 = ルカ 12:10、マタイ 8:20 = ルカ 9:58、6:22。
- 15) 同上。註50：「ねばならない」(δεῖ) マルコ 8:31 並行、その他ルカ 17:25、マルコ 9:31 並行 10:33 並行 9:9 並行マタイ 26:2
- 16) 同上、165頁
- 17) 同上、166頁参照。他に、小林稔「ヨハネにとってのイエス」『イエスキリストの再発見』サンパウロ、1994年、97頁も参照。
- 18) 伊吹雄『ヨハネ福音書と新約思想』創文社、1994、198～199頁。終末論的規定として「～から (ek)」について論じる。
- 19) V・E・フランクル『〈生きる意味〉を求めて』1999、春秋社、185～6頁
- 20) 大貫隆氏は、前掲書、248頁、及び、訳書 E. ケーゼマン著「イエス最後の意志」の解説の中で、イエスの永遠の神性は、啓示の業に媒介されることを説明して次のように語る。「人が何であるかは決して生涯の始まる前から決定済みなのではなく、その人が自分の

人生をどのように生き、そこで何を為してゆくかによって、その生涯の終わりになって初めて決定されるように、イエスの形而上学的本質も、彼の啓示のわざの道のりの終わりから最終的に決まってゆく」と。

- 21) 伊吹雄『ヨハネ福音書注解』、65頁「すなわちこの『肉』は、何よりも、霊のアナムネーシスにおいて、十字架の死と復活という栄光化により照らされ、かつ貫通された肉なのである。」87頁「証言が受肉から十字架の死という史的順序でなく、その逆であることで、栄光化のイエスに見られる十字架（『世の罪を取り除く神の小羊』）から、その先在が明るみに出されていくのである。」等を参照。
- 22) 同上、68～69頁
- 23) 川中仁「イエスが愛していた弟子—ヨハネ福音書における『愛された弟子』の象徴機能—」『人間学紀要』上智人間学会 33号、2003年、182頁
- 24) 同上、183頁。
- 25) 伊吹雄『ヨハネ福音書注解』172頁。註66として創22,2.12.16；ヘブライ11:17（イサクのこと）等参照。
- 26) 同上、172頁。伊吹『ヨハネ福音書と新約思想』94～121頁は、福音書記者が、世への御子の派遣を、御父と御子の愛の発現と見なし、その愛にイエスによるすべての救いの出来事の根拠を見出していることを伝承史的に論じている。ヨハネ以前の伝承には、すでに、神が御子を我々への愛のゆえに死に渡したとする遺棄定式と、イエスの死をキリストの愛のゆえの自己献身と見る定式があるが、ヨハネはその両者に、恐らくは知恵文学に由来する派遣形式を結合させ、死に到るまでの子の生涯を、父の愛とその父に一致した子の派遣と愛の開示として理解する。尚、ヨハネ3:16「独り子を与えるほど」が、神の犠牲と愛の大きさを強調する表現であることは、創世記22:16のアブラハムが最愛の息子イサクを犠牲として捧げよう

としたことを背景として理解され、神が「その御子をさえ惜しまず死に渡された」（ロマ 8:32）ことを愛の表れとする遺棄定式伝承にも見られる。

- 27) 伊吹『ヨハネ福音書注解』まえがき、xii 参照。
- 28) 小林稔「ヨハネ福音書の〈エゴ・エイミ〉—その訳し方をめぐって—」『カトリック研究』64 上智大学神学部、1995 年、11 頁註 19 参照。
- 29) 同上、11 頁。註 19。
- 30) 同上、1～33 頁。及び小林稔「ヨハネ福音書の〈わたしがいる〉」『アレーテシア』日本基督教団出版局 15 号、1996 年、10～15 頁は、ἐγὼ εἰμι のそれぞれの箇所についての訳出の違いについて論じている。今回取り上げるのは、その中で、イエスを話者とし、補語が明示されない ἐγὼ εἰμι 定型句の中でも、日常用語では説明のつかない用法と区分されているものである。尚、6:20. 18:5, 6, 8 については、日常用語で一応説明がつくものと分類されることもあるが、イエスの言葉がもたらす結果が、普通ではないので、背景には絶対的用法に近い意味が込められていると説明されている。
- 31) 間垣洋助『ヨハネ福音書のキリスト論』1984、聖文舎、146 頁
- 32) 小林稔「ヨハネ福音書の〈エゴ・エイミ〉」4～5 頁
- 33) イザヤ 45:8 及び 45:18
- 34) 小林稔・大貫隆訳『〈新約聖書 III〉ヨハネ文書』（岩波書店、1995）補注用語解説 14 頁。
- 35) イザヤ 43:10. 44:6. 45:5 ほか
- 36) イザヤ 48:12～13. 51:12～13.
- 37) イザヤ 46:4. 52:6. 特に 43:25. 51:12 は強調した形。
- 38) 間垣洋助『ヨハネ福音書のキリスト論』1984、聖文舎、146 頁以下参照。〈ani-hu〉とは元来〈ani YHWH〉の代わりでありイスラエルが信仰を持って受け取るべき現実を示す神の言葉であり、そこには信仰の決断が求められる。

- 39) 以下は西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1999、を参照。
- 40) 同上、192頁。
- 41) 同上、204頁。
- 42) 同上、240頁。「例えば、その意味ある他者が、母であるときの〈わたし〉と、社会や共同体となったときの〈わたし〉とは、〈わたし〉の意味内容が違ってくる。」
- 43) 同上、211頁
- 44) 同上、249頁参照。
- 45) 同上、205頁及び216頁註11参照。また、218頁には「アイデンティティとは、エリクソンにおいては、正確にはアイデンティティ感覚 (a sense of identity) として使われ、そのアイデンティティを生きている当の本人の感覚を、内側から、存在感の次元において、自我親和的に受け入れたところに成り立つ感覚=実感 (sense) として理解された言葉であった」とある。
- 46) 同上、229頁。
- 47) 同上、229頁。自我の相手役は、「イドとスーパーエゴ」ならびに「環境」、自己のそれは「他者たち (the “others”)」、〈わたし〉のそれは「厳密に言えば神なるもの (the deity) のみである」。
- 48) 柳田敏洋、前掲記事、1月号 (2004) 35～36頁
- 49) 西平、前掲書、226頁。「an observing center of awareness and of volition」と説明がついている。(YC135)
- 50) 同上、225頁。
- 51) 同上、235頁
- 52) 同上、235頁。「〈わたし〉の感覚 (a sense of “I”) は、感覚的に気づいているということ (our sensory awareness) に、一つのヌミノース的中心 (a numinous center) を与えている。(Yale Review 1981,p.329)」尚、ヌミノース的について、西平氏は日本語訳を記していないが、「神霊の、精霊の、超自然的な、神秘的な」という意

味であろうか。

- 53) 同上、236 頁。(the ground for the simple verbal assurance)
- 54) 柳田氏は、前掲記事において、人間の内面に宿る神の霊と響き合う私自身を「真実の私」と表現し、さまざまな選びの時には、この「真実の私」の思いを見分けることで、「正直な私」の動きを越えて選ぶ必要があると語る。
- 55) 小林稔・大貫隆訳『〈新約聖書 III〉ヨハネ文書』(岩波書店、1995)。ただし〈 〉記号は筆者による。
- 56) 小林稔『アレーティア』前掲記事、14 頁。又、前掲「ヨハネ福音書の〈エゴ・エイミ〉」6 頁には、翻訳の定本となるギリシア語版聖書では、8:58 の「エイミ」を、アクセント記号の違いによって本動詞に解するよう校訂されていること及び、古代コプト語訳がそのように訳し分けていることが根拠の一つとして説明されている。
- 57) 同上、14 頁。
- 58) 伊吹雄『ヨハネ福音書注解』228 頁参照。
- 59) 西平直、前掲書、241～242 頁。
- 60) 同上、244 頁。
- 61) 同上、242 頁。
- 62) 同上、252～3 頁参照。
- 63) 同上、246 頁参照。しかし、エリクソンは、このような超越的アイデンティティは、この地上においては決して実体化されることがなく、人はそれを生きることはできず、言い換えれば、こうした超越的アイデンティティはこの地上ではあくまで理念に留まり、また留まらねばならないと言う。そうでなければ、地上において超越的アイデンティティの体現者であると名乗る人物こそ、最も危険な差別と排除の原因となるからである。
- 64) 栄光 (δόξα) の背景には、旧約の קָבוֹד (kabod) がある。神の顕現の時、人間は神を見ることができない (出 33:20) が、神の栄光を見る (出 29:43、王上 8:10 - 11) ことはできる。そのように、神の

栄光は神が臨在することを示すしるしであり（イザヤ 6:1 - 6）、目に見える現象である。旧約においては神“のみ”のものであった栄光を、福音書記者はイエスにも適用する。

- 65) 百瀬文晃『イエス・キリストを学ぶ』中央出版社、1986、143頁。
- 66) 小林稔『ヨハネ文書』の訳による。
- 67) この表現は、百瀬文晃『キリスト教の原点－キリスト教概説 I－』教友社、2004、159頁「人間にとってもっとも大切な生は、神の前での生であり、その生は過ぎ去ることのない、永遠のいのちへと導く」を参照した。